

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4090700057
法人名	社会福祉法人 薫風会
事業所名	風の里グループホーム
所在地	福岡県北九州市八幡西区里中2丁目17-13
自己評価作成日	平成28年10月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 アーバン・マトリックス 福祉評価センター		
所在地	福岡県北九州市戸畑区境川一丁目7番6号		
訪問調査日	平成29年11月18日	評価結果確定日	平成29年1月31日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人一人の生活のペースを大切にし、自立されている方も、意思の疎通が困難な方も、職員もその人らしく過ごせるような空間や人間関係でありたいと努力している。具体的には、「職員の個性を活かした対応」や、「先入観やルールにこだわらない対応」や、「利用者にとって不安な事・嫌いな事(しかし生活する上で避けられない入浴や排泄など)の原因の追求と改善策で迅速に対応すること。」などである。また、利用者・職員間、職員同士などのコミュニケーションが円滑に行える空間であることを活かし、程よい関係性の構築ができ、皆が居心地の良さを感じることができている。その他、対面式キッチンならではの調理中の会話や食事の香り、利用者の家族との充分な関わり等からつくりだすグループホームならではの「家庭的な雰囲気」が、利用者の認知症症状による不安や混乱を軽減し、安心して生活できることにつながっていると考える。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

日常の中で具体的な言葉や場面を大切にとらえ、ひもときながら思いや意向の把握につなげ、利用者一人一人の「声」をそのままニーズとして位置付け、介護計画書の中に反映している。アセスメント様式は、単に「できる」「できない」ではなく、できる為に必要な支援やできない事の意味について、「気づき」の質を高めながら、身体機能や精神面から細やかに分析され、個別の人物像が伝わってくる。開設して10年目を迎える中、当初より掲げる理念の具現化に向けた取り組みを重ね、言葉だけでなく、根拠のある「その人らしさ」への関わりが印象的な事業所である。共同生活の中での暮らしの継続を、本人、家族、職員がお互いに受け止め、ともに自分らしく過ごせる居場所づくりに取り組んでいる。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の共有はできている。「勇気」の「現実を変える事を恐れない。」という部分が、まだ不十分だと思うので、実践に繋がられるよう努めていきたい。	「納得」「共存」「勇気」という法人理念のもとに、事業所独自の基本方針を掲げている。新規採用者の研修では理念の共有を重要視し、総会やミーティングの中でも共有や振り返りの場面を持っている。常に課題意識を持ちながら、理念と現実に向き合い具現化に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	系列の保育園との交流(夏祭り・敬老会)また、地域の行事としてお祭りなどに参加している程度で、まだ不十分。	地域の金山川祭りの実行委員としての役を担い、利用者の方々も参加を楽しみにしている。近隣にある同法人保育園とは、敬老会や保育園の夏祭り、野菜の収穫等を通じて、相互に交流を重ねている。利用者主体の地域とのつながりを意識し、交流場면을模索している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2カ月に1回運営推進会議などで報告や情報交換を行っている程度で、地域への発信は未だ不十分である。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の中で利用者の近況報告や事故報告などを行い、事故については再発防止策にご家族の意見も取り入れたり、その実施状況や結果などを継続的に報告したりしている。	運営推進会議は、複数の家族や自治区会副会長、近隣精神科病院看護部長(認知症介護指導者)、地域包括支援センター職員等の出席を得て、2ヶ月に1回開催されている。運営状況の報告や事故状況の報告を行い、家族より権利擁護制度に関する質問や課題に関する意見も出され、意義のある開催と運営への反映に努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	推進会議で地域包括と交流する程度で、まだ不十分である。	運営推進会議には、地域包括支援センター職員の出席を得ている。他事業所の取り組み情報やアドバイスを頂き、サービス向上に活かせるよう取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「身体拘束の11項目」よりさらに踏み込んだ拘束防止・利用者の希望の尊重に取り組んでいる。行きたいこと、したいことを注意深く察知しスタッフ側の都合で制限せず、介助が必要な利用者に少しでも自由に動くことが出来る環境整備を行うなどの実践を行っている。	身体拘束・虐待防止について、定例研修会のテーマとして位置付け、また、認知症をテーマとして個別の事例検討を重ねている。物理的な拘束はもとより、本人の意向や思いを抑制していないか等、様々な視点から検討を行い、個別のより良いケアの実践に結び付けるよう取り組んでいる。ソファの高さ調整や居室の環境整備を行い、細やかな視点から抑制廃止やリスク軽減に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体的だけではなく、心理的な虐待にも常に注意を傾けている。また、家族同様の関係性の深さからくる利用者との親密な会話にも、利用者の尊厳を守ることができているかを常にフィードバックできるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者としてケースを通して学ぶ機会があった。今後は担当スタッフを中心に個々のスタッフに学習の機会を設定したい。	入居時に、権利擁護に関する制度について情報提供を行っている。現在制度を活用している方や必要性を検討している事例もあり、支援の過程を通じて学ぶ場面も多い。運営推進会議の中で、家族より制度に関する質問もあり、身近な制度として捉えている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	新規入所の際は、ご家族への説明は勿論のこと、本人にも会って話をするなど納得をしていただき契約をむすんでいる。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議を開き事業所運営に対する意見等が表せる場として活用し、出された意見を運営に反映させている。また、ピアカウンセリングの場としても有効に機能している。	運営推進会議の案内を広く行い、家族の参加も多い。具体的な意見や質問が出され、家族同士の意見交換も行われている。日常的生活面・健康面等の情報共有はもとより、事業所便り「風のひとりごと」を発行し、日常の様子を写真を用い伝えたり、年2回、ホームパーティを開催し、コミュニケーションを深めている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度フロアミーティングと毎日のミーティングで事象の軽重を問わず職員との意見交換を行っている。それらの意見を施設長は法人運営会議の場で、理事長をはじめとする法人幹部と共有できるようにしている。	全員参加を基本とする月例のフロアミーティングや日々の申し送りを通じて、情報共有や意見交換を行っている。年に1回、職員個々の自己申告書をもとに個人面接を行い、意見や考え方等の情報収集に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に1度自己申告書を提出してもらい、それに基づき個人面接を実施し、その情報を理事長以下の法人幹部が共有・対処している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	年齢・資格等に関わらず採用を行い、採用後も能力の優劣にとらわれず、職員個々の個性を介護力として行かせるように努めている。	採用された職員の個々の個性や能力、実績等の把握に努め、ケアや業務に活かせるよう努めている。定例研修会や認知症についての事例検討会、スキルや経験によって個別の研修計画も作成されている。子育てや産休、病休後の復職者への配慮を行い、働きやすい職場環境の整備に取り組んでいる。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	一般的な研修の機会等を利用するだけでなく、介護の場面ごとに利用者の人権を尊重し、または侵害していないかを問題提起しながら啓発している。	日々のケアの場面において、一つ一つの事例に対しどう人権を守るのか、実践面に重点を置いた職員教育を意識しており、管理者や施設長が日常的に課題提起して、啓発している。人権や法令遵守・倫理をテーマとする年間研修計画が作成されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	もっぱらOJTでの教育が中心である。モデリングや共に実践しながら、さらには狭い空間の中で、管理者が手を出しすぎてスタッフの自立を損なわないように心がけている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	特には行えていない。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前の情報の共有は勿論の事、利用者の要望や変化を見逃さず、担当職員を中心に積極的に関わり、信頼関係をつくっている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	些細な事でも気になった事は家族に情報を取る事で、話しやすい関係を作る事に努め、不安な事などこちらから聞いている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族が今何を求めているのかを見極め、出来る限りの対応を行っている。面会時などに率先して利用者の状態を報告するなどして早期に信頼関係が築けるようにしている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	お互いに支え合い、気遣いし合える関係作りを行っている。一方的で独善的な過剰な介護にならないよう個人々の求めている事を常に話し合っている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者を優先して考えつつ、家族も精神的に支えられるようにしている。時にはスタッフが間に入り、両方の関係が上手くいくように取り持つこともある。		
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住み慣れた家に帰ったり、昔の知人が会いに来やすいように配慮を行っているが、もっと利用者からの要望を引き出し、支援出来るように努めていきたい。	入居時のアセスメントや日常の中で気づきを得ながら、馴染みの関係性の把握に努めている。自宅宿泊や通い慣れた美容室の利用、外食等、家族との積極的な連携を図りながら外出支援が行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士で築かれた関係を大切にし、コミュニケーションが困難な方は間に入るなどして関わりが保てるように努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所されても相談しやすい人間関係を利用中から築けるよう努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	1人1人の生活の背景を把握し本人が「どうしたいのか?」と問いかけを怠らず、表情や言動などに気を付けて対応している。要望の表出がない場合も、積極的に楽しみの提供などが試行できるようにしている。	様々な視点から情報を収集し、利用者の方々のこれまでの暮らしの把握や人物像の理解に努めている。職員個々が「気づき」の質を高められるよう指導し、日常の中の具体的な言動や場面を大切に捉え、本人本位の検討を行い、思いや意向の把握につなげている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	データベースや本人、家族からの情報を基に把握しているが、利用期間の長い利用者でも日頃から本人・家族と話しをする事で色々と新しい情報なども知る事がある。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1人1人のペースを保ちながら、楽しみ(晩酌・間食・談笑等)を提供しているが、まだまだ支援していきたい事は沢山ある。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者によっては、状態が著しく変わることもある為、日頃から些細なことでも記録に残しつつ、職員個々が把握している情報を共有する場を設け、出された意見が介護計画に反映できるようにしている。	担当職員を中心として把握された情報を共有し、本人の言葉をニーズとして位置付け、本人本位の暮らしを介護計画書の中に反映できるようにしている。日々の記録や担当者による毎月のモニタリング、カンファレンスや事例検討を通じて、現状の確認と見直しの必要性について検討を行っている。	
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々タイムリーに記録を残し、毎日の申し送りの時間を報告・相談の場として活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	現在のところ、グループホーム本来の機能で個々のニーズに対応できている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	非課税世帯に対するオムツ給付や、年長者施設利用証を利用するなど、利用者の生活に役立てられるように支援を行っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月に2回往診を受けており、医療連携体制加算に基づく連携状態を活用し充分に対応している。	入居時にかかりつけ医について確認し、家族との連携を図りながら情報共有に努めている。また、協力医療機関より、月2回訪問診療が実施されており、夜間の連絡体制も整えている。日常の暮らしぶりを把握している看護師が配置されており、主治医等との連携を密にし、適切な医療が受けられるよう支援している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場の看護師、又は、往診に来るかかけ医院の看護師にその時々適切な指示を・看護を受けている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院前・入院中の段階から、家族と一緒に職員が病院に同行し情報の共有に努めている。主治医等と連携し、早期退院に向けた働きかけも積極的に行っている。また、入院中重度化した場合も、施設での看取りを積極的に勧め不要な入院が続かないようにしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	急変時や終末期など、状態に変化が表れた事に早く気づき、家族に報告を行い、終末期のケアを含めて、何を求めているのかを確認し施設で出来る可能なケアを精一杯行っている。	重度化した場合や終末期のあり方について、事業所としての方針を明文化し、入居契約時に説明している。医療との密な連携や家族との情報共有及び意向の把握に努め、方針を共有している。これまでには運営推進会議の年間テーマとして終末期ケアを位置付けた経緯もあり、事業所として出来る限りの暮らしの継続を支援している。	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルに沿った行動がいざという時に迅速にできるか不安もあるが、定期的に施設内で研修を行い備えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に防災訓練を行い、災害が起こった時に備えている。	火災及び自然災害に関する防災マニュアルを整備し、隣接する同法人保育園との連携を図り、年2回、昼夜を想定した防災訓練を実施している。訓練時には、階上のマンション居住者の協力を得る機会がある。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の利用者に不適切な声掛けを行わないように日頃から気を付けている。その人なりの自尊心のポイントはどこかを見極めながら、尊重する事を常に心がけている。	本人の言葉を大切にとらえ、細やかに情報を収集・分析し、利用者個々の理解と尊重に努めている。個別の状況に応じた適切な声掛け(声量)について振り返りを行ったり、個別の生活リズムとサービス提供(入浴・食事等)がっているか等、細やかに検討されている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望の表出が出来ない利用者のサインを見逃さないよう努力している。また、自己決定されたことが尊重されるように配慮している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事時間や就寝・起床など、無理強いすることなく利用者のペースやサインに合った対応を心がけている。意思の疎通が困難な利用者については、昔の生活のペースなどを参考にし対応している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	モーニングケアや入浴後のケアなどで、好みに応じた身支度が出来るように配慮している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事会や利用者の嗜好に応じたメニューや外食などはいままでもなく、終末期の利用者にも、最期まで好きなものを食べられるよう、臨機応変に対応できている。。対面式キッチンの為、調理中に利用者とお話をしたり、作る段階から同じ空間を共有している。	日常の中で嗜好の把握に努め、時には食材の買い物に利用者と共に出かけている。対面式のキッチンから調理の様子が伝わり、職員との会話も弾んでいる。形状や提供方法、彩り等、細やかな配慮が行われている。食事やスイーツを楽しむために出かける機会もある。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量に応じて、間食等、個別対応を行っている。無意識に完食を求め、過剰な食事介助などを行わないよう配慮している。水分摂取も嗜好に合ったもので楽しみながら行えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	うがい等が困難な利用者には洗口液を使用したり、スポンジブラシを使うなど工夫しながら怠らない様にしている。ケアを嫌がる利用者への働きかけも工夫を怠らないようにしたい。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表等で個々の排泄パターンを共有し、適切で快適な排泄につながるよう支援している。終末期の利用者も可能な限りトイレでの排泄を介助している。また、トイレでの排泄が自然でスムーズな排泄に結び付くことも職員にフィードバックしている。	排泄チェック表による個別の状況把握に努め、カンファレンス等にて検討を行い、日中はトイレでの排泄を基本として支援している。また、個別のサインを見逃さないよう職員間で共有認識を図り、トイレ誘導を歩行訓練としても位置付け、個別の支援を行っている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	パソコン上に毎日入力を行い、職員が確認を行っている。便意に基づく排便誘導を可能な限り優先することが便秘予防になっている。また、医師に相談したり、排便を促す飲料水などで個別に対応している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴表に沿って介助を行っているが、利用者の希望に応じた入浴ができていない。入浴が苦手な利用者にはスタッフ間で成功例などを共有しながら不安なく入浴が出来るように努めている。	週3回の基本的な入浴スケジュールを設定しているが、体調や希望により柔軟に対応している。時間帯も午前と午後を選択ができ、ゆっくりと浴槽に浸かってくつろいでいただくようにしている。拒否される方には、声掛けの方法や時間を変えるなどの工夫をしている。一番風呂を好む方等、介護計画の中に位置付けながら支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は、利用者の状態に応じて声をかけ休息をとってもらっている。夜間は、その人その人に合った就寝時間を見極めて安眠に繋がるように支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の種類、目的、副作用を把握し、変更・増減時には、特に気を付け症状の変化を確認するようにしている。変更の際は、情報の共有を怠らないようにしている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	先入観にとらわれず、色々な事を試し張り合いや喜びを支援できるよう努めていきたい。現在もドライブや外食など企画し実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	急な外出の希望にも出来る限り対応している。	外出や外食、買い物等を介護計画の中に位置付け、日常的に外出支援を行っている。ベランダや玄関前にて、日常的に外気浴をするよう心がけており、天気の良い日には少し足を伸ばして、近くのコンビニエンスストアや電停、公園まで出かけている。近隣保育園の畑に野菜の収穫に出かけたり、コスモスや桜見と一緒に出かける企画もされている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が出来る利用者については、見守りをしたりしている。その際、家族とも情報共有しながら、トラブルを未然に防げるようにしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望に合わせて電話を使用していたっている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自分の居場所があるという認識がもってもらえるような環境作りに努めている。トイレなどは、いつも清潔に使っていただけるように臭いなどにも配慮している。室内の温度・湿度にも配慮し定期的に換気することで外気にも触れていただける。	座りやすく工夫された大きなソファやテーブルが置かれたリビングでは、時間の経過や利用者同士の関わりの中で、自然に築かれた居場所が確保されている。対面式のキッチンからは調理の様子が伝わり、生活感がある。行事の写真や書道の作品が飾られており、日常の様子がうかがえる。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有スペースのリビングでは食事の場所などある程度決める事で、自分の居場所を認識していただく。その他、自由に過ごしていただけるような空間づくりに努めている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	一人一人の居室になじみのある家具を置いたり、安全面にも配慮している。	ミニキッチンが備え付けられ、窓に設置された障子が日差しを和らげている。仏壇や筆筒、冷蔵庫やテレビ、生活用品と趣味の品々が持ち込まれ、生活感がある。ベランダのプランターで花を育てている方、遠方から泊まりに来る家族のために予備のベットや布団を用意されている方もいる。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	物の配置は安易に変えず、認知症の方に合わせて工夫を行っている。安全だけにとらわれず、本人の力を見極めた環境作りに努めたい。		